

## 図書館員の四季

### “夏の思い出”

高松赤十字病院

高松赤十字看護専門学校 井上 孝子

異常に涼しいこの夏、同窓会の案内状が届く。昭和58年別府大の司書講座受講から早くも10年目を迎え、「月日は百代の過客にして、行きかう年も又旅人なり・・・」かの有名な芭蕉の句の一節を身に沁みて感じる。

当時の大学キャンパスは別府市の中心より4キロ離れた鶴見岳の麓にあり、雄大なスロープを背景に、別府湾を眼下に一望できた。山あいには自然の恵み豊かな湯けむりが白く立ちのぼり、通学路にも蒸気が吹き出して別府ならではの風景であったが、何年来の猛暑で天も地も熱く燃え、別府地獄を肌で感じたものである。昭和55年は図書館法が定められて30周年という記念すべき年であったため、九州でも多彩な行事が行われたことを知ったのもその時であった。

東京、沖縄にまたがる受講生の大半は学生で能力、体力のハンディに不安があったこと、それにもかかわらず副リーダーに推薦され驚いたこと、テストの連続で温泉気分も吹き飛んだ日々をなつかしく思い出す。受講者は多才な人たちが司書講習の開講以来初の文集を発行し、国立国会図書館に納本したことはライブラリアンを目標とする者の絆を深めてくれる良き思い出となった。

昭和60年より病院と学校の専任司書として兼務している。当院は図書は分散管理で各科に配本しており、医局図書は雑誌の配架を中心に3階の廊下の一角に位置している。狭いながらも種々活用されているようである。当院も新築工事の着工に伴い、新図書室の内容の充実、相互貸借、ネットワーク等の多くの課題を抱えているが、あの猛暑の夏を思い出し、ランガ・ナータンの五原則を改めて思う今日この頃である。

### ジョギングと エンドルフィンと図書室と

耳原総合病院 小猿 友子

取り立てて走ることに情熱を傾けているわけではない。かといって、走ることがそう嫌いなわけでもない。毎朝ではないけれども、週5回くらいは自宅近くの仁徳天皇御陵（百舌鳥耳原陵とも言う）の周囲をひたすら走っている。痩せたい！という密かな目論見を携えて・・・。

走り始めは毎回つらい。もう止めよう、明日こそは止めようと思いつついつい走ってしまう。行程の半分を過ぎた辺りから、どういうわけか俄然元気が出てくる。これはきっと脳内にエンドルフィンが湧き出て、モルヒネ様作用が発現してくるためと思われる。4km走り終えるたびに満ち足りた気分になるのはそのためであろう。

私が図書室勤務になってから、早いものでもう4年が過ぎた。最初は、はっきり言って図書室の仕事をするのがとても嫌だった。しゃべらない本や雑誌を相手にどうマネージメントすればいいのかという戸惑いもあった。それが今ではどうでしょう！自分で言うのも変だが、それこそ毎日ルンルン気分で図書室へやって来ている。情報をパソコンにインプットし、それが利用者に大いに役だっていることを目のあたりにした時など一種の快感についてニンマリしてしまう。少ない資料を十二分に活用し、さらに狭いスペースをいかに大きく使うべきかと、日夜せせせとデータベースに情報を入力する。ものは考えよう、大は小を兼ねると言うけれど小を大に変身させるべく、またエンドルフィン効果を何度となく体験するためにも悪戦苦闘している毎日である。